乳幼児医学・心理学研究 18（2）：139－146（2009）

特集「親子間の反発性：子どもの能動性の意味」

アタッチメント形成過程に潜む母子のアンビバレンス
――子どもの反撥性と能動性に着目して――

小 林 隆 児*

Abstract：Discussions on attachment formation to date have focused on "approach" primarily from the standpoint of the child. However, the process of attachment formation is not simply that of a child approaching the caregiver, but can also involve displays of repulsion, as noted in more than a few cases. Such "child-caregiver" relationships were examined through a case encountered in our clinic for relational development. The subject was a boy, 4-yr-0-months at the start of support. What became evident through the course of support was that the ambivalence initially noted in the child was not a characteristic of the child alone, but that it was repeatedly vanishing and reappearing within the child-caregiver relationship. The mother's overly synchronous and excessive approaches to involve the child in conforming to her expectations ingrained a fear of being overwhelmed in the child, eventually leading to displays of strong repulsion towards the mother, which in turn triggered fears of abandonment in the mother. That is, contrary to initial expectations, what emerged was ambivalence in both the mother and the child. Subsequent interviews revealed that the mother's ambivalence stemmed from the mother's relationship with her own mother. It was images of herself winning praise by fulfilling her mother's expectations that were being manifest in her current child-caregiver relationship. Taking up this perspective in the interviews led to dissipation of the mother's ambivalence, and direct expression of the child's dependency needs. In conclusion, it was emphasized that considerations for nurturing independence and spontaneity in children thus need to be made within the framework of the child-caregiver relationship.

Jpn. J. Med. Psychol. Study Infants, 18 (2): 139-146, 2009

Key words：abandonment anxiety, activity, aggression, ambivalence, relational development, spontaneity

Ambivalence of mother and child in the process of attachment formation: Focusing on repulsion and spontaneity on the part of the child

＊大正大学人間学部臨床心理学科〔〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1〕
Ryuji Kobayashi: Department of Clinical Psychology, Taisho University School of Human Sciences, 3-20-1 Nishi-sugamo Toshima-ku, Tokyo 170-8470 Japan

はじめに

昨今，子ども虐待臨床においてアタッチメントの重要性が声高に叫ばれるにつれ，発達障碍臨床，とりわけ自閉症スペクトラム障碍臨床においてもアタッチメントの問題が取り沙汰されるようになってきた。しかし，アタッチメント形成にまつわる問題は〈子－養育者〉関係という二者関係において議論されなくてはならないにもかかわらず，不思議なことに多くの場合，子どものアタッチメント行動にばかり注目が集まっている。その象徴的なものがアタッチメント障碍という概念である。子どものアタッチメント行動を受けとめる養育者の問題が等閑視され，まるでアタッチメントの問題は子どもの問題であるかのような印象さえ受ける。その主たる要因にはアタッチメントの概念そのものに孕まれている。アタッチメント attachment の語義が示すように，本来アタッチメントは，子どもが養育者に「くっつく attach」という行動上の特徴から捉えたものである。アタッチメント障碍なる概念が生まれるのも至極当然の帰結であるといわなければならない。

このアタッチメントと類似した概念に日本語の「甘え」があるが，アタッチメントとは異なり，「甘え」の意味するところは極めて多義的である。養育者に接近するという行動上の意味はもちろんのこと，そこに生まれる情動面の動きをも包含しているゆえに，乳児はもちろんのこと，大人においても「甘え」によってそのこころの動きを捉えることが日常的に行われている。

「甘え」が子どもにおいて最初に顕在化するのは生後半年を過ぎたころからで，生後7～8ヵ月頃に出現する人見知りの現象においてもっとも目立つようになる。このように，「甘え」は相手である養育者があって初めて可能になる。すなわち，「甘え」は対象指向性を持っている。その対象との間で「甘え」が充足したり，されなかったりするわけであるが，それゆえ必然的に「甘え」はアンビバレンスを孕む素地が生まれる（土居，2009）。なぜなら，子どもは生まれた直後から少なくとも数年間，とりわけ最初の1年間全面的に養育者に依存しなければ延命さえ全うできない。養育者はそのような子どもたちを無条件に受け止め，養育しなければならないが，それは誰にとっても容易なことではない。養育者自身，現実生活の中で家族みんなの世話をしなければならないことが多かろうし，夫婦関係や家族関係に様々な葛藤を抱えていることも珍しくないであろう。さらには過去の子ども時代にどのように養育されてきたか，その体験が自ら養育者になった際に様々な形で子どもとの関係に影を落とす。養育者は子どもと相対する際に，子どもの甘えを無条件に受け入れることは難しい。子どもは「甘え」をめぐってアンビバレントにならざるをえないのはそのためである。乳児は養育者の顔色をうかがい，自分が受け入れてもらえるか否かに敏感にならざるを得ない。よってアタッチメントにまつわる問題の議論は，相手との関係という枠組みの中で行われなければならないのである。

乳幼児期における〈子ども－養育者〉関係においてアタッチメント形成が極めて重要な課題であることはいうまでもないが，これまでアタッチメントの重要性，つまりは子どもの養育者への「接近性」にばかり注目が集まり，それがあまりにも肯定的に語られることで，養育者は子どものアタッチメント欲求を無条件に受け入れなければならないという暗黙のプレッシャーを与えられてきたことも確かである。本特集は，そのようなこれまでの「接近性」を中心としたアタッチメントにまつわる議論に対して，別の視点，つまりは「反撥性」からの検討も必要ではないかとの意図から生まれたものである。そこで筆者はアタッチメントにまつわる問題を〈子ども－養育者〉関係の枠組みから捉え直してみたいと思う。その際，とりわけ子どもの「甘え」にまつわるアンビバレンスが養育者との関係においてどのように変容していくか，そ

こでの力動的な様相に焦点を当てて考えてみたい。

ここで取り上げる事例は MIU（Mother-Infant Unit）（小林，2000）で実践したものであるが，以下提示する観察データは初診以来2年3ヵ月の経過を追って得たものである。セッションは原則1，2週間に1回で各々およそ1時間であった。

事例提示

A男　初診時年齢　4歳0ヵ月
知的発達水準　境界域
臨床診断　自閉症
主訴　ことばの遅れ，ひとり笑い，こだわり。
家族構成　父方祖父母，両親，姉，A男の6人家族。
発達歴・現病歴　胎生期は特に問題はなく，満期安産だった。しかし，乳児の時から身体は弱く，風邪をこじらせては肺炎になり，喘息気味で，生後1年はほとんど寝てばかりであった。そのためもあってかあまり母親になつかず，どことなく視線も合いにくく，もの静かな子でおとなしいという印象の強い子どもであった。人見知りがなかったために，手もかからず子育ては楽だった。家業の手伝いもあったので，仕事ができて助かったというのが正直な気持ちだった。1歳の誕生前にはハイハイをせずにいきなり歩けるようになった。1歳6ヵ月健診では特に異常を指摘されることはなかった。2歳の時，保健所で初めてことばの遅れを指摘された。ことばはなかなか出てこなく，2歳半になってようやく発語。3歳児健診で，知的障碍児施設に通うことを勧められたが，当時は両親ともさほど深刻に思わず，なんとかなるのではと軽く考えてどこにも通わせなかった。

3歳過ぎるころから，タオルケットを始終お守りのように持ち歩くようになり，それを取り上げると火がついたように激しく泣くようになった。あまりにもかんしゃくが激しいので，さすがに両親も心配になり，地域のこども病院小児科を受診し精査を受けたが，発達の遅れ以外に特に異常は指摘されなかった。発達検査では2歳程度と言われた。

その後，次第に自分ひとりで遊ぶことが増え，そんな時にはひとりで自分の世界に没頭してぶつぶつとつぶやいていることが多くなった。時に，天井を見て笑い出したり，手をヒラヒラさせたりすることもみられるようになった。

3歳すぎの春先から保育園に通うようになったが，園では相変わらずひとり遊びが目立ち，集団活動にはまったく興味を示さなかった。園の方から問題を指摘されて，両親も心配になり，4歳0ヵ月，近所の人の勧めで筆者のところに受診となった。

新奇場面法（SSP）にみられる母子コミュニケーションの特徴　ふたりで過ごしている時には，母親の積極的な働きかけに対しておとなしく黙々と応じていたが，最初の母子分離においては，母親の退室に気付きながらも後追いをすることなく，まるで母親の存在には頓着しないようにも見えた。しかし，すぐに情動面の激しい混乱を示し，ついには不随意運動と思われる奇妙な反応（チック様発声，前腕のけいれん様運動）を見せ始めた。さらにはひとりでつぶやくようにして空を見つめるほど奇異な行動まで出現してきた。母親の熱心なA男への働きかけには回避的な態度を示しながらも，いざ母親が不在になると，明らかに不安は高まっていたことが示されている。しかし，母親を求めるような直接的行動を取ることはできない。非常に強い動因的葛藤が認められ，ついには動因的葛藤行動としての不随意運動を思わせる反応が生じている。母親に対するアンビバレンスが顕著で，様々な不随意運動，独語や空笑などがそれとの関係で誘発されていることがみてとれる。

母子関係の変容過程

第1段階　A男の関係欲求をめぐるアンビバレンスを緩和する

関係発達支援において筆者が最初に目指したことは，A男にみられる関係欲求（甘え）をめぐるアンビバレンスを緩和し，両者の関わりを肯定的なものにしていくことであった。そこで筆者が実際に行ったことは，母親の不安と焦りの中での関わりをいかにして穏やかなものにしていくかということの様々な工夫であった。そのため，母親の具体的な関わりを取り上げて，助言を繰り返していった。この段階で筆者がもっとも心を砕いたのは，子どもの様々な動きが養育者との関係の中で起こっていることに気づいてもらうことであった。セッションの中で「いま，ここで」起こっていることを具体的に取り上げながら考えてもらうと同時に，MIUでの録画ビデオを手渡し，自宅で振り返ってもらった。

第2段階　母親の過度な同調が再びA男のアンビバレンスを強める

これまでの母親の過剰な働きかけが背景に退くことによって，次第にA男自身が前景に浮かび上がることによって，A男の気持ちが様々な形で表に現れやすくなっていった。そこで目立ち始めたのが，A男が母親に盛んに頼ろうとする行動，すなわち母親参照 maternal referencing であった（第4回）。母親の行動には以前のような自分主導の関わりは影を潜めたが，それに代わって目立ち始めたのが，過度に子どもに同調しようとする行動であった。そのため，A男に一時的には母親に頼る行動が顕在化していたにもかかわらず，再びアンビバレンスが強まり，今度は逆に過度に自立的にふるまうようになっていった（第5回）。この時期，母親は次第に追い込まれ，自分の子育てに対して自信を失い，「頭の中が真っ白」になってしまうほどであった。

第3段階　A男の自己主張が強まるにつれ母親の新たな不安が生まれる

A男の自己主張はその後ますます強まっていったが（第6回），それにつれて母親に新たな不安が再び顔をもたげ始めた。A男のわがままがこのまま助長されていくのではないか，しつけをしなくてはいけないのではないか，という迷いだった。A男が自分を自由に出せるようになってきたことはうれしいが，その反面自己主張が歯止めをなくし，どんどんエスカレートし，わがまま放題の子どもになっていくのではないかという不安であった。母親は表面では子どもに対して自分にもっともっと甘えてほしいと願っていたが，その一方では子どもの自己主張が強まることに対して，強い困惑を示すようになっていった。そこに母親自身がかかえていた甘えをめぐるアンビバレンスをみてとることができた。

第4段階　強まる甘えと自発性の開花

A男の熱発で母親の看病を受けたせいもあったのであろう。第9回ではA男の甘えが急激に強まっていった。それと同時に自発性，能動性が目立って表に現れるようになった。父親もA男の動きに合わせて遊びにつきあうようになり，両親とA男との関係はこの時期，これまでにないほど平和的になっていった。

第5段階　母親の過度な同調とA男の母親に巻き込まれる不安

A男の積極的な反応を見るうちに，母親は一緒に遊ぶことの面白さを少しずつ実感するようになっていった。すると再び浮かび上がってきたのが，母親の過度にA男に同調する関わりであった。A男のやることをうんと褒めて，どんどん遊びを促していく。A男の一挙手一投足に注目し，熱心に関わろうと努力していったのである（第10回）。

しかし，それがA男にはあまりにも強すぎて侵入的に映るようになっていった。A男は

自分を失うような不安を起こすようになったのである。その具体的な反応が，A男の激しい「イヤダ！」の連発であった（第11回）。

第6段階　母親はA男に突き放される不安を抱くようになる

A男の自己主張である「イヤダ！」は母親の困惑を生み，どのようにしたらよいか母親の不安はどんどん強まっていった（第16回）。不安に突き動かされて母親はA男に懸命に関わろうとするが，そのような母親の関わりをA男はますます拒否するようになっていった。このようにして両者の間には負の循環が再び増強していった。ついに母親はA男によって自分が突き放される不安，すなわち見捨てられ不安を抱くようになっていったのである。

第7段階　母親自身の子ども時代の姿が蘇ってくる

この段階で次第に明らかになってきたのが，過度にA男を褒める母親の姿は，子ども時代に自分の母親に褒めてもらうために懸命になって頑張ってきた自分の姿そのものであるという気づきであった。この時期，母親はこれまでにないほどつらい思いをしながら，自分の過去を想起していった。そして「頭ではわかっても実際にはどうしてよいかわからず」混乱の時期がしばらく続いた（第20回）。

このようにして母親はA男と自分との関係が，自分と自分の母親との関係と深くつながっていることに気づくとともに，自分が子ども時代に母親の期待に応えようと懸命に頑張ってきたことにも気づいていったのである（第22回）。

こうした母親の洞察は，その後の母子関係に強い影響を与えていくことになるが，それはすぐに起きてはいない。いまだ母親のA男への関わりにはぎこちないものがあった。

第8段階　転居によって三世代同居による母親の気遣いが軽減される

この時期，家庭環境に大きな変化が起きた。同居していた祖父母とA男親子が転居を機に両世帯の間に距離が生まれることによって，それまでの母親の気遣いが随分と軽減されていった（第24回）。

第9段階　父親がA男の創造的世界を広げる役割を果たす

A男は母親に対してアンビバレントではあっても，母親への甘えたい気持ちを次第に明確に現わし始めていった。その過程で明らかにA男はたくましくなり，外界への好奇心が高まっていった。その段階でA男の気持ちに応えてくれたのが，遊び場面で付き合ってくれた父親であった。A男の好奇心に満ちた遊びの世界，創造的な世界を父親は具体的にA男の目の前で展開してくれたのである（第26回）。そんな父子の交流を母親がうれしそうに眺めながら，ゆったりとした気持ちでA男を見守るということができるようになっていった。

第10段階　A男は安心して母親に甘えるようになる

先のような父親の積極的な関与は，母親にとっても随分と救いになり，家庭環境の変化と相まって，母親の気持ちに多少なりともゆとりが生まれていった。A男はそうした母親の変化を敏感に感じ取り，これまでにないほど安心して母親に甘えるようになっていった（第32～35回）。

この時のA男の甘えは，これまでにないほどストレートなものであったが，けっしてすぐにそのような形で表現されたのではなく，当初は強いためらいをみせながら，徐々に甘えが顕在化していった。ここにもA男の日頃からの用心深い警戒的な一面がよく示されていた。

第11段階　A男は保育園に再び通うようになる

母親に安心して甘えるようになっていったA男は，まもなく長い間休んでいた保育園に自発的に通い始めた。そして無事卒業式を迎えることができた。母親の子どもとの間で基本的信頼感，安心感が育まれていくことによってA男は初めて社会に目が向き，出て行くことができるようになったのである。

考　察

1. 子どものアンビバレンスはどのように推移したか

SSPでA男にアンビバレンスが強く認められたが，関係支援の経過の中で明らかになったのは，このアンビバレンスが母親との関係の中で増強や消退を繰り返していたことである。つまりは，子どもにみられるアンビバレンスは単に子どもに帰属する特徴として取り上げることはできず，〈子－養育者〉関係の中で捉える必要があるということである。その関係の内実について具体的に検討すると，以下のことが分かる。

最初から母親はいつもA男が自分にもっと甘えるようになることを願っていると自ら語っていた。関係発達支援の初期，筆者の介入により母親のA男への侵入的な関与が影をひそめることによって，一時的にA男の甘えは顕在化した。そのことは母親にとって喜ばしいことであったが，その結果，母親はA男の動きに余りにも同調するようになっていった。そのため，A男は母親に取り込まれる不安を抱くようになっている。その後も母親が子どもの一挙手一投足を取り上げて過度に褒めるようになったことで，子どもの不安は再び増強し，ついにはA男自ら母親に直接向かって「イヤ!」とはっきり口にするようになっている。いよいよA男は母親に飲み込まれる不安を抱いたからである。

このような母子関係の変容過程をみていくと，A男は甘えたい気持ちを抱きつつも，母親に取り込まれることによって自分が無くなる不安を抱いた。そのために，A男は母親の関与に対して拒否的態度を示し，過度に自立的に振る舞わざるを得なくなっているのである。痛々しい姿ではあるが，こうしてみると，A男が母親に対して甘えたくても容易に甘えられないのは，単に子ども自身のアンビバレンスゆえではなく，母親の関係の中で生まれているということがいえるのである。

2. 母親にみられるアンビバレンスとその起源をめぐって

つぎに問題となるのは，なぜ母親がこれほどまでに（無意識に）A男を自分のペースに取り込もうとしたのかということである。このことについても母子関係の変容過程で明らかになっている。

ひとつには，A男の甘えを受け入れることによって，A男のわがままな自己主張が歯止めをなくしてしまわないかという不安が母親に生じていることに示されている。その後，母親はA男を過度に褒めて自分の願う方にA男を引き込もうとするまでになっているのである。こうした母親の関与に対して，A男は激しく母親を拒否するようになるが，その結果，母親に見捨てられ不安が生じている。母親との面接の中で，その背景に母親自身の子ども時代の被養育体験が深く関係していることが浮かび上がってきている。子ども時代に自分の母親の期待に応えることで褒めてもらうという体験が自ら母親になった時に子どもとの間に再現していることが明らかになってきたのである。母親の子どもに対して抱くアンビバレンスが自らの子ども時代の母親との関係に起源をもっていたということである。

3. 子どもの能動性，主体性をはぐくむために

以上，アタッチメント形成にかかわる過程を〈子－養育者〉関係の枠組みでみていくと，子

どもにみられるアンビバレンスが二者関係の中で生み出されていることが示されたが，つぎに取り上げたいのは，子どもの主体性，能動性を育むための養育には何が大切かという問題である。

子どもであれ親であれ，アンビバレンスが生み出されるのは，そもそも人間そのものが両義的存在であるためである（鯨岡，1998）。他者と繋がり合いたいという繋合希求性と自分らしくありたいという自己実現欲求という本来両立しがたい思いを人間のこころが孕んでいるということである。両義性は両価性（アンビバレンス）と背中合わせの関係にあるのである（小林，2000）。したがって，子どもの主体性，能動性の議論はこうした文脈の中で語られなくてはならない（小林，2002；小林，2005）。

親に絶対的に依存しなくては生きていけない子どもと養育者との非対等の関係にあっては，乳幼児期早期の子どもが養育者に全面的に甘えてくる際に養育者はそれをしっかりと受け止めなくてはならないが，ここで問題となるのが本稿でも取り上げたように養育者自身のアンビバレンスである。アンビバレンスは親との間で自らの関係欲求（甘え）がなんらかの理由によって充足されなかったことに端を発していると考えられるゆえ，養育者の被養育体験を等閑視することはできない。養育者としての役割を果たすことができるようになるためには，〈育てられる者〉から〈育てる者〉へのコペルニクス的展開（鯨岡，2002）が求められるが，過去の甘えにまつわる強いアンビバレンスを抱え込んでいると，それが〈子－養育者〉関係において本事例のように生々しい形で露呈してくるのである。

本事例で示されているように，この母親のアンビバレンスに巻き込まれることは子どもにとって自分の主体性，能動性を失うことにもつながりかねないゆえに，A男は母親の過度に同調的な関わりに対して強い反撥を示したと考えられるのである。

したがって，子どもの主体性を育むためには，養育者自身も自らのアンビバレンスを克服していく作業が必要になる。それによって初めて子どもの甘えにまつわる様々な思いを無条件に受け止めて対応することが可能になっていくのである。このようにして子どもの甘えが受け止められ，充足していくことによって初めて基本的信頼感が両者間に育まれていく。それが基盤となってその後の「しつけ」と称される様々な社会的学習を自らの体験として体得していく道が切り開かれていくのである。

おわりに

アタッチメントをめぐる議論がこれまで「接近性」にのみ注目が集まり，あまりにもその肯定的側面が強調されてきたように思う。その最大の要因は子どもの側の行動的側面に光を当てているアタッチメントの概念そのものに孕まれている。そこで筆者は〈子－養育者〉関係の視点から捉え直した。そこで明らかになったのは子どもの側の甘えにまつわるアンビバンレスは子どものみの問題ではなく，母親自身のアンビバレンスも深く関わっていることであった。母親自身の子ども時代の被養育体験がその背景要因として大きく関わっていたということである。したがって，子どものアタッチメントに関わる臨床では，子どものみならず親の側のアンビバレンスをも取り上げることは不可欠である。その意味でアタッチメント形成に関わる臨床において関係の視点をもつことはぜひとも必要である。したがって，アタッチメント形成を踏まえた子どもの主体性や能動性を育むための議論も，養育者の側の主体性を抜きには考えられない。筆者が関係発達臨床で「関係」の枠組みを強調するゆえんである。

引用文献

土居健郎（2009）．臨床精神医学の方法．東京，岩崎学術出版社．

小林隆児（2000）．自閉症の関係障害臨床―母と子のあいだを治療する―．京都，ミネルヴァ書房．
小林隆児（2002）．乳幼児期の母子コミュニケーションからみた両義性と両価性．こころの臨床ア・ラ・カルト，21(1)，17-23．
小林隆児（2005）．主体性をはぐくむことの困難さと大切さ―幼児期と青年期をつなぐもの―．そだちの科学，5，35-41．
鯨岡　峻（1998）．両義性の発達心理学．京都，ミネルヴァ書房．
鯨岡　峻（2002）．〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ―関係発達の視点から．東京，日本放送出版協会．

執筆者紹介

略歴：1975年：九州大学医学部卒業
現在：大正大学人間学部臨床心理学科教授　医学博士
関心：従来の精神発達とその精神病理を関係発達臨床的視点から捉え直すこと。
所属学会：日本精神神経学会，日本児童青年精神医学会，日本乳幼児医学・心理学会，日本心理臨床学会，日本小児精神神経学会，日本精神分析学会，日本トラウマティック・ストレス学会，日本思春期青年期精神医学会，日本精神病理・精神療法学会，日本発達障害学会，World Association of Infant Mental Health